



# 北方民族博物館だより

## No.125



H27.1 海獣狩猟の道具 イヌイト（エスキモー） グリーンランド／シオラパルク  
64×91×57cm 2010年、大島育雄製作

氷上のアザラシを射撃する猟銃を載せる、滑走板付きの台。氷の色に同化して見えるように、白い布製のスクリーンを取り付けて用いる。ハンターがスクリーンの陰に隠れるよう腹ばいになり、台上に猟銃を固定し、スクリーン中央部の孔から銃口を出す。台を滑らせながら獲物に近づくが、その際、音を消すため、滑走板の底面にホッキョクグマの毛皮が貼ってある。本資料は、1970年代から今日までグリーンランド北部の村シオラパルクで狩猟しながら暮らしている大島育雄氏により製作された。

### 目次 Contents

- 1 表紙 海獣狩猟の道具
- 2 ロビー展 「暖かい」だけじゃない！毛皮と北方民族の多彩な関係  
／講座 毛皮と北方民族
- 3 館長講座 環境に優しい北方文化：トナカイ毛皮のリサイクル  
／講座 北方民族の“威信財”をめぐって
- 4 INFORMATION

## ロビー展

### 「暖かい」だけじゃない！ 毛皮と北方民族の多彩な関係

共催：国立アイヌ民族博物館・ArCS II 沿岸環境課題  
2022.4.16-5.15

北方地域では、厳しい冬の寒さを防ぐコートやブーツ、テントや皮舟の覆い、道具を入れる袋、物を縛りつけるひもなど、さまざまな生活用品の素材として動物の毛皮や革が活用されてきました。また、美しい毛皮は、他地域との交易品としても重要な役割を果たしてきました。

本ロビー展は、当館と国立アイヌ民族博物館、ArCS II 沿岸環境課題のコラボイベント「毛皮と北方民族の多彩な関係」の一環として、北方地域における毛皮の利用について紹介しました。トナカイ、ヘラジカ、オオカミ、ホッキョクギツネ、アゴヒゲアザラシ、ワモンアザラシ、クロテン、ビーバーを取り上げ、それぞれの動物の毛皮と、その毛皮を素材とした民族資料を展示しました。

このうちトナカイのコーナーでは、コリヤークのトナカイ毛皮製衣類を紹介しました。暖かそうな毛皮製の帽子、上着、ブーツと、毛を取り除いた革製の夏用の衣類を並べて展示しました。夏用衣類の材料は、最初はテントのカバーとして使われた毛皮を再利用したものです。煮炊きの煙で燻されており、蚊を防ぐ効果を持つということです。

ホッキョクギツネのコーナーでは、毛皮製の帽子や上着とともに、毛皮製衣類とダウンジャケットの機能の違いをパネルで紹介しました。寒い環境で密閉性の高いダウンジャケットを使用すると、内部が結露してしまいます。一方、毛皮は汗の水分が外に放出され、乾いた状態を保つことができるのです。

来館者のなかには、動物1頭分の毛皮の大きさや質感に驚いたり、毛皮を素材とした民族資料を熱心に撮影したりする方もおられました。（学芸グループ 中田 篤）



トナカイの毛皮コーナー

## 講座

### 毛皮と北方民族

2022.4.16

講師：山口未花子氏（北海道大学大学院文学研究院）  
田村将人氏（国立アイヌ民族博物館）  
日下稜氏（北海道大学低温科学研究所）

ロビー展の関連事業として、毛皮と北方民族の関わりを紹介する講座を開催しました。

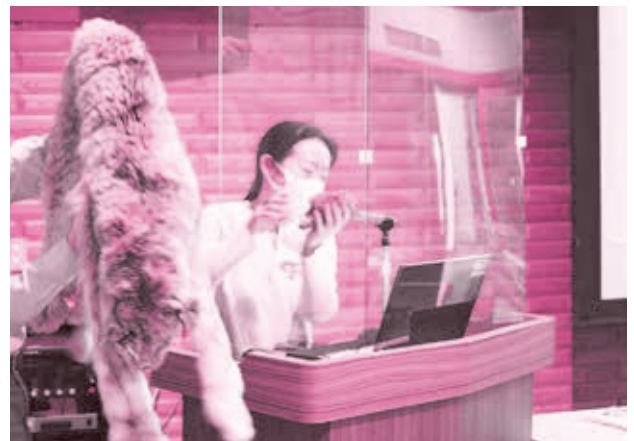
まず、山口未花子氏は「動物の皮から生まれるモノたち」と題し、カナダ・ユーコン準州に暮らす先住民のヘラジカ皮の利用について紹介しました。彼らにとって皮の利用は、動物と向き合い、「伝統文化」を体現することに結びついています。また、皮は自然から無料で得られる、現金収入の手段となる貴重な資源でもあります。皮の利用によって、人と動物との親密な関係が維持されているのです。

次に、田村将人氏は、「1940年代、サハリン先住民の毛皮獣狩猟」と題し、サハリン南部が日本領だった時期の樺太アイヌ、ウイルタ、ニブフの毛皮獣狩猟について紹介しました。各先住民とも、アザラシ類やヒグマ、クロテンなどを狩猟し、その毛皮を衣類の材料や交易品として利用していました。また当時、国のバックアップでオットセイの毛皮の生産・加工を担う会社が設立され、活動していたことも紹介されました。

最後に日下稜氏は「50年間変わらない北グリーンランドエスキモーの毛皮衣類」と題し、グリーンランド北部・チュレー地区に暮らすエスキモーの、衣類の材料としての毛皮利用について紹介しました。現地では、現在も獲物の毛皮で衣服が作られています。その際、例えば靴にはアザラシの毛皮が使われるなど、種によって異なる毛皮の特性を活かした利用が随所に見られるということです。

当日は講師が持ち寄った毛皮や毛皮製品も披露され、参加者の注目を集めていました。

（学芸グループ 中田 篤）



講師の山口氏とオオヤマネコの毛皮

## 館長講座

環境に優しい北方文化：  
トナカイ毛皮のリサイクル

2022.4.24

講師 呉人 恵（当館館長）

ArCS II沿岸環境課題・国立アイヌ民族博物館・当館のコラボイベント「毛皮と北方民族の多彩な関係」の一環として、館長講座「環境に優しい北方文化：トナカイ毛皮のリサイクル」を行いました。まんえん防止等重点措置が解除され、ようやく参加者の皆様との対面形式での講座が可能になり、嬉しさもひとしおでした。

講座では、私がこれまで現地調査をおこなってきたトナカイ牧畜民コリヤークを対象にお話しました。まず、コリヤークの居住地域や生業について概観したうえで、本題であるトナカイ毛皮の加工と利用の特徴について、トナカイ毛皮をとる（＝屠畜）方法やそこに刻まれた動物資源観、毛皮の用途、季節による使い分け、男女分担と加工方法、巧みなりサイクル・システムなどの観点から紹介しました。



解説を行う呉人館長

コリヤークたちは、生きたトナカイを屠（ほふ）るという犠牲を払わなければ、肉や毛皮を得ることができません。屠畜が、一家のお守りにトナカイの血や骨髓を塗って供養するなどの儀礼的側面を持ち、決められた手順で入念に行われるのは、犠牲に対する罪悪感からであることが考えられます。トナカイの死に対するこうした配慮は、毛皮の無駄のない丁寧な利用にも繋がっていきます。毛足が長くて分厚い冬の毛皮は住居（ユルト）に、柔らかい産毛に覆われた夏の毛皮は衣類や革紐（ひも）にと、季節により異なる状態の毛皮を巧みに使い分けます。のみならず、屋内の焚火（いぶ）で燻されたユルト・カバーは、防水性に富み蚊を寄せつけない特性から、春から秋にかけての衣類（コート、帽子、ブーツ）にリサイクルされます。春・秋用は毛を残して短く刈る一方で、夏用は毛をすべて削るなど、気温差にも対処しています。女性は住居と衣類を加工し、男性は革紐類を加工するというように、製法の違い（前者はなめしや縫製工程がありますが、後者にはありません）と男女の別を対応させているのもまた、実に合理的な役割分担といえるでしょう。

講座が終わった後も、講義室の前に置いた季節毎に異なる衣類のところによって来て、その違いを確かめている参加者の方々の熱心な眼差しがとても印象的でした。

（館長 呉人 恵）

## 講座

## 北方民族の“威信財”をめぐって

2022.3.20

講師 野口泰弥（当館学芸員）

環北太平洋地域の狩猟採集民社会では、宝物（専門用語として“威信財”）の文化が発達しました。この地域の狩猟採集民の中には階層化した社会（貴族、平民、奴隷層の分離など）を営む人々がいたことでも知られています。このことは、世界の狩猟採集民の多くが、平等主義的な社会を営み、生存に必要な最低限の物質文化しか持っていなかったこととは対照的です。しかし、環北太平洋の威信財と社会の階層化の関係については、あまり研究が進んでいません。

人類学史をひも解くと、威信財を贈与したり交換したりすることによって、人々は高い威信を得ることができるとする見解が多く見られます。また、威信財の流通を掌握することによって、特定の人々がより強い権力を持つことができるという考えも示されてきました。このように人類学において、威信財の研究は流通の局面に集中しています。言わば威信財とは流通（贈与、交換、分配など）するためのモノであり、その威信の基盤は、概ね外部社会との繋がりがりだと見なされてきたわけです。



野口学芸員

しかし、北方民族の事例を見ていくと、これとは異なる性格の威信財が存在することに気がきます。例えばアリュートが狩猟で用いた木製の帽子は、現地社会で非常に高い価値が認められていましたが、広範に交換や贈与されてきたわけではないようです。アリュート研究者のリディア・ブラックが推測するように、「クラシック・アリュート型」という精巧な帽子は特に捕鯨と強く関係しており、その威信の基盤は巨大なクジラに立ち向かう猟師としての能力にあったと考えられます。

人類学者の渡辺仁は環北太平洋の狩猟採集民社会には、大型獣狩猟に特化した家族と、漁労を中心とした家族という生業の分化が広く見られ、技術的に難しい大型獣狩猟に特化した人々が社会内で高い威信を持ち、上位に立つと主張しました。これを踏まえると、この地域の狩猟採集民社会には大型獣狩猟の技術や能力を威信の基盤とするような宝物が広く存在することが想定できます。実際に、アリュートの帽子以外にも、アサバスカンの銅製ナイフなどは大型獣狩猟と結びつく威信財だと考えられます。このような性格の宝物がどのように社会の階層化と関係するかは、今後、追究していきたいと考えています。（学芸員 野口泰弥）



## 第37回特別展

### イヌイトの壁掛けと先住民アート

カナダのイヌイトの女性たちが、ダッフル製衣服のはぎれからはじめたといわれる壁掛けを、初期のものから現代の作品まで、当館が所蔵する岩崎昌子コレクションを中心に展示するとともに、北方各地の先住民アートの事例を紹介します。

会期 令和4年(2022年)7月16日(土)～10月16日(日) \*会期中の休館日 10月3日(月)、10月11日(火)

会場 北海道立北方民族博物館特別展示室

観覧料

◇特別展 一般450円 65歳以上300円 高大生200円

◇常設展・特別展セット 一般800円 65歳以上300円 高大生320円

### 関連講座

◇上映会「北方民族博物館シアター夏」

日時 8月21日(日) 10:00-11:30

解説 笹倉いる美(当館学芸主幹)

◇講座「特別展解説講座」

日時 9月17日(土) 13:30-15:00

解説 笹倉いる美(当館学芸主幹)

◇講演会「美術史からみた先住民アート」

日時 9月25日(日) 10:00-11:30

講師 大下裕司氏(大阪中之島美術館学芸員)



オレンジ色の大きな壁掛け  
アイリーン・アヴァーラーキアク作

## INFORMATION

### 行事報告

◆3月19日(土)はくぶつかんクラブ「バスケットづくり」(講師:塩谷舞 解説員)を開催しました。



うまく作れたかな?

◆4月27日(水)～6月19日(日)斜里町立知床博物館にて移動展「トナカイと暮らすタイガの遊牧民たち」を開催しました。



会場の様子

◆5月8日(日)上映会「北方民族博物館シアター 春」(解説:中田篤主任学芸員)を開催しました。



解説を行う中田主任学芸員

◆4月23日(土)～5月22日(日)北網圏北見文化センターにて移動展「カザフの壁掛け展 ―北海道立北方民族博物館所蔵資料展―」を開催しました。



会場の様子

◆5月3日(火)～5日(木)ゴールデンウィークイベントとして「オリジナルマグネットキット」を先着100名様にプレゼントしました。



オリジナルマグネットキット

### 北方民族博物館だより No.125

令和4年(2022年)6月21日発行  
編集・発行 北海道立北方民族博物館  
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1  
Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889  
e-mail: tonakai@hoppohm.org  
http://hoppohm.org

指定管理者

一般財団法人北方文化振興協会